

原著

保育・子育て実践における「個の尊重」 — ジェンダーの視点から再考する —

三村 保子^{*} 力武 由美^{**}

〈要 旨〉

本研究は、ジェンダー・ステレオタイプの形成につながる行為が保育実践の場において観察されたことをもとに、保育・子育て環境の実態を定量的に把握し、慣習的に保育理念とし実践していると自認されてきた「個の尊重」について、ジェンダーの視点から再考することを目的とする。そのため、保育・子育て環境として重要な役割を担う保育所（園）の保育士と保護者各515名を対象に、理念としての「個の尊重」がどのように保育実践の中に実態化されているのかを明らかにするために、両者における保育理念と実践との相関ならびに保育実践とジェンダー意識との相関を見る質問紙調査を実施、分析した。

結果として、以下のことが明らかになった。1) 保育者が実践していると自認する「個の尊重」とは「男女の本質的性差の尊重」を前提とした保育実践である、2) 男女の特性論がジェンダー・バイアスに基づく非対称的な概念であることへの認識が十分ではない、3) 保育士・保護者が自らのジェンダー・バイアスに気づかないまま子どもにジェンダーを再生産している。

これらの知見から、「個の尊重」という保育理念に基づく保育実践の自認と実態との間には大きな隔たりがあることが明らかになった。したがって、本調査は乳幼児の個性が真の意味において尊重され育まれるジェンダー・フリーな保育・子育て環境を形成するためには、どのような生活体験を子どもたちに提供することが望ましいのかを再検討する上で、示唆に富む基礎資料を提示しているといえる。

キーワード：個の尊重、ジェンダー・バイアス、隠れたカリキュラム、ジェンダー・センシティブ、ジェンダー・フリー

I. 研究の目的

保育実践において慣習的に掲げられている「その子らしさを生かす保育」「一人ひとりを大切にする保育」、いわゆる「個の尊重」という目標は、いつの時代にも重視され、また実践もなされてきた。この背景には、「性別、人種、宗教、門地など」により侵害されることのない基本的人権としての「個人の尊重」を明文化した日本国憲法（1946年制定）、子どもまたは保護者の人種や性などの差別を禁止した子どもの権利条約（1994年発効）、「個人の尊重」と「男女の人権の確立」を明文化した男女共同参画社会基本法（1999年制定）、「子どもの人権に十分配慮し、「性別による固定的な役割分業意識を植え付けることがないように」と明記して

いる保育所保育指針（1999年改定）などがあると考えられる。

しかしながら、保育実践の場においては、ジェンダー・ステレオタイプの形成につながる行為はしばしば観察される。そのことを基に、保育・子育て環境の一つとしての保育現場の現状を把握する予備調査として、2005年7月の授業中、本学保育科2年次の学生162名に対し、これまで体験した保育所実習（2005年2月）と幼稚園実習（2004年11月、2005年5月～6月）で観察したジェンダーに関するエピソードを自由記述で求めたところ、次のようなエピソードが確認された。（保育所および幼稚園はA市とその近郊に位置している。）

・男の子が泣いていた時、「男の子なんだから、泣いたらダメ！」。

* 西南女学院大学短期大学部保育科 教授

** 西南女学院大学短期大学部生活創造学科 非常勤講師

- ・女の子がおもちゃを振り回して遊んでいた時、「女の子だから、そんな乱暴してはいけません」。
- ・男の子には「かっこいいね」、女の子には「かわいいね」と男女でことばかけを変えていた。
- ・男の子がオレンジ色の紙を選んだら、他の男の子に「うわー!! 女の子だ」と言われていた。
- ・女の子がトイレの前で我慢していたので、トイレに置かれている水色のスリッパを指さして「スリッパがあるよ」と伝えると、「水色だからはかない」と言った。

これらのエピソードから、保育者が意識しているか否かにかかわらず、保育者のジェンダー意識とそれに基づく行為は、「隠れたカリキュラム」として園全体に浸透し、ジェンダーの再生産という形で直接的に子どもたちの育ちに影響を与え、その実態が広く存在するのではないかと予測した。

そこで本研究では、保育・子育てにおいて慣習的に理念とされ実践していると自認されてきた「個の尊重」が、保育実践の中でどのように実態化されているのか、保育士・保護者の保育理念と実践との相関ならびに保育実践とジェンダー意識との相関を見ることで、そこにギャップがあるかないか、あるとすれば何が「個の尊重」の実態化の障害となっているのかを明らかにすることを目的とする。

松村¹⁾ (1992年)、森²⁾ (1995年)、池田ら³⁾⁴⁾ (2001年)、佐藤ら⁵⁾⁶⁾ (2003年、2004年)の先行研究においても、ジェンダー・バイアスに基づく保育行為やしつけは日常的に行われており、慣習化されていることが多いことは指摘されている。しかしながら、保育理念として掲げられた「個の尊重」と、それを実態化する上で障害となっている保育者自身に内面化されたジェンダー・バイアスとの相関関係に着目した研究は、緒についたばかりである。

なお、本研究では、社会的文化的につくられた性差を「ジェンダー (gender)」とし、生物学的性差である「セックス (sex)」とは区別して用いる。また、「ジェンダー」は、生物学的性差の上に男性優位の意味が人為的に付与されてきた概念であるが、その基になっているのが、科学的根拠をもたない女性に対する偏見すなわち「ジェンダー・バイアス (gender bias)」である。それに対し、ジェンダー・バイアスに縛られないありようが「ジェンダー・フリー (gender free)」という概念である。さらに、ジェンダー・バイアスに捉われている自己を意識化し、修正していこうとする姿勢

を「ジェンダー・センシティブ (gender sensitive)」と表すことにする。

II. 研究の方法

1. 調査対象および調査方法

- ①九州圏内の保育所 (園) 130施設の保育士・保護者に対し、質問紙調査を依頼した。保育士518名、保護者521名から回答が得られた。このうち、保育士・保護者ともに515名を分析対象とした。

2. 調査期間

2005年8月

3. 調査内容

池田ら³⁾⁴⁾の先行研究を参考にして、保育士と保護者に対し、以下の質問項目で回答を求めた。

- ①保育環境における性別カテゴリーの適用についての保育士・保護者の意見とその現況 (2件法)
 - 整列、出席簿・名簿、ロッカーの割当、園服のデザインや色、教材の色、行事のプレゼントの色、カバンや上履きの色、運動会や発表会の種目の一部、クラスのグループ編成。
 - 玩具の与え方、性別による禁止・励まし・指示・ほめ言葉、名前の呼び方など。
- ②保育・子育て方針とジェンダー (4件法)
 - 男の子は男らしく女の子は女らしく育てる、男の子と女の子の本質的違いを大切に育てる、男の子は強くたくましく育てる、女の子はやさしく思いやりのある子に育てるなど。
- ③ジェンダー・ステレオタイプな言葉かけ (2件法)
 - やっぱり女の子ね、かわいいね、やさしいね、お片づけが上手ねなど。男の子だからそんなことぐらいで泣かないの、男の子だからがんばれ、さすが男の子だね、男の子だからハッキリしなさいなど。
- ④子育て観 (4件法)
 - 男の子と女の子は本質的にちがう、子どもが3歳まではやはり母親が育てた方がよい、子どもが病気の時は母親がそばにいるべきだ、母親は子どもを育てることが第一の仕事だ、子育ては母親の方に適性がある。
- ⑤「男らしさ」「女らしさ」について (自由記述)

Ⅲ. 結果と考察

1. 回答者の属性

表1 回答者の属性

| 保護者(515名) | | | 保育士(515名) | | |
|-----------|---------|-----|-----------|--------|-----|
| 性別 | 女性 | 334 | 性別 | 女性 | 494 |
| | 男性 | 181 | | 男性 | 20 |
| 年代 | 10代 | 1 | 年代 | 無回答 | 1 |
| | 20代 | 133 | | 20代 | 143 |
| | 30代 | 338 | | 30代 | 134 |
| | 40代 | 42 | | 40代 | 138 |
| | 50代以上 | 1 | | 50代 | 92 |
| | | | | 60代以上 | 7 |
| 子の年齢 | 0歳 | 43 | 通算勤続年数 | 無回答 | 1 |
| | 1歳 | 116 | | 3年未満 | 49 |
| | 2歳 | 116 | | 3～5年 | 55 |
| | 3歳 | 76 | | 6～9年 | 105 |
| | 4歳 | 75 | | 10～19年 | 122 |
| | 5歳 | 79 | | 20年以上 | 175 |
| | 6歳 | 8 | | 無回答 | 9 |
| | 無回答 | 2 | | | |
| 就業形態 | 正規雇用 | 298 | 就業形態 | 正規雇用 | 437 |
| | 非正規雇用 | 205 | | 非正規雇用 | 72 |
| | 休職中 | 1 | | 無回答 | 6 |
| | 無回答 | 11 | | | |
| 子の送迎 | 母が主 | 330 | | | |
| | 父が主 | 19 | | | |
| | 父母で協力 | 93 | | | |
| | 祖父母・身内 | 65 | | | |
| | 地域のサービス | 1 | | | |

回答者の属性は表1の通りである。保護者515人中女性は334人(65%)、男性は181人(35%)であった。保育士は515人中、女性494人(96%)、男性20人(4%)であった。年代別にみると、保護者は20代133人(26%)、30代338人(66%)、40代42人(8%)となっている。保育士は20代143人(28%)、30代134人(26%)、40代138人(27%)、50代92人(18%)であった。

2. 保育実践における「個の尊重」という理念と保育行為のギャップ

本調査では「保育環境における性別カテゴリーの適用についての意見とその実態」の各質問項目に対する回答結果は、図1の通りである。全般的な傾向として保育士は80%から90%、保護者は70%から80%が「必要でない」と答えている。しかし、保育士の保育行為を見てみると、「必要でない」と答えているにもかかわらず、「実際には行っている」ことが明らかになった。特に、名前呼び方(70%)、ほめ言葉(52%)、性別による指示(37%)、園庭などでの整列(32%)、出席簿・名簿(30%)の項目において、顕著にその傾向が

見られる。松村¹⁾も、保育園・幼稚園の保育者に対する意識調査をもとに、保育者は性別による子どもへの「らしさ」の教育は「必要でない」としているが、実際には、色や名簿、運動会の競技や劇の配役などを性別で分けたり指定することがあると報告している。また、「男の子だから～」「女の子だから～」という言葉かけも多くの保育者が経験しているという。

このような保育実践における「個の尊重」という理念と保育行為との乖離がなぜ生じるのかということに関して、森²⁾(1995年)の研究は示唆的である。森は、幼稚園での具体的な観察事例を通して、性別カテゴリーの使用が保育ストラテジー化されていることを検証している。たとえば、制服、呼称、出席取り、整列などにおいて男女の区別は歴然としており、これらは合理的な説明がなされないまま、集団統制のための手段として日常的に繰り返されているという。

性別カテゴリーを使用した保育行為が問題なのは、男女の違いが自明なことであり、「男の子が先」という観念を子どもたちにつくりあげてしまうことにある。また、性別カテゴリーの使用が園全体の慣習や伝統と

保育・子育て実践における「個の尊重」

図1-1 性別カテゴリーの適用についての意見とその実態(保育士)

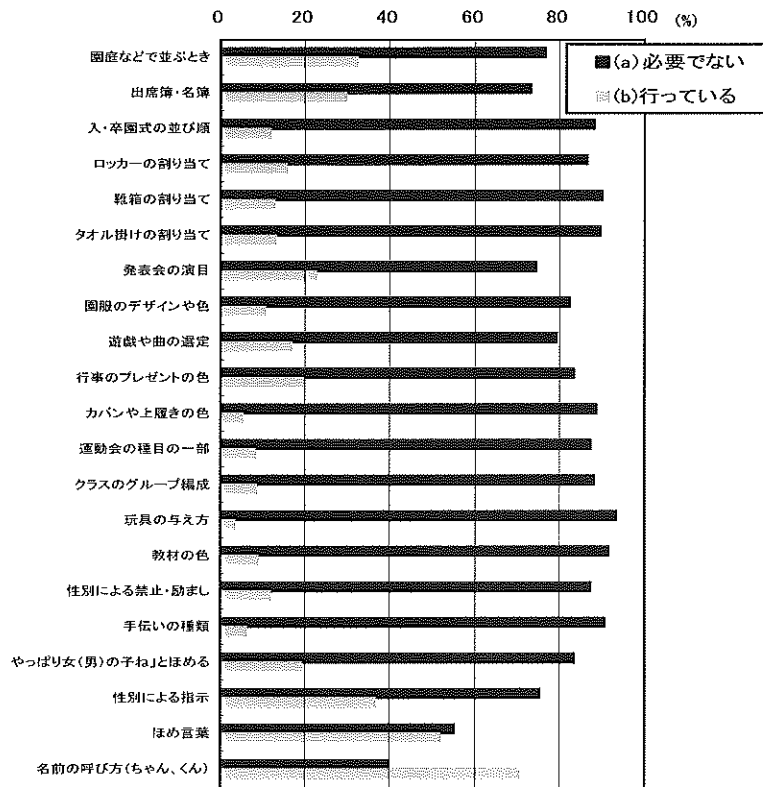
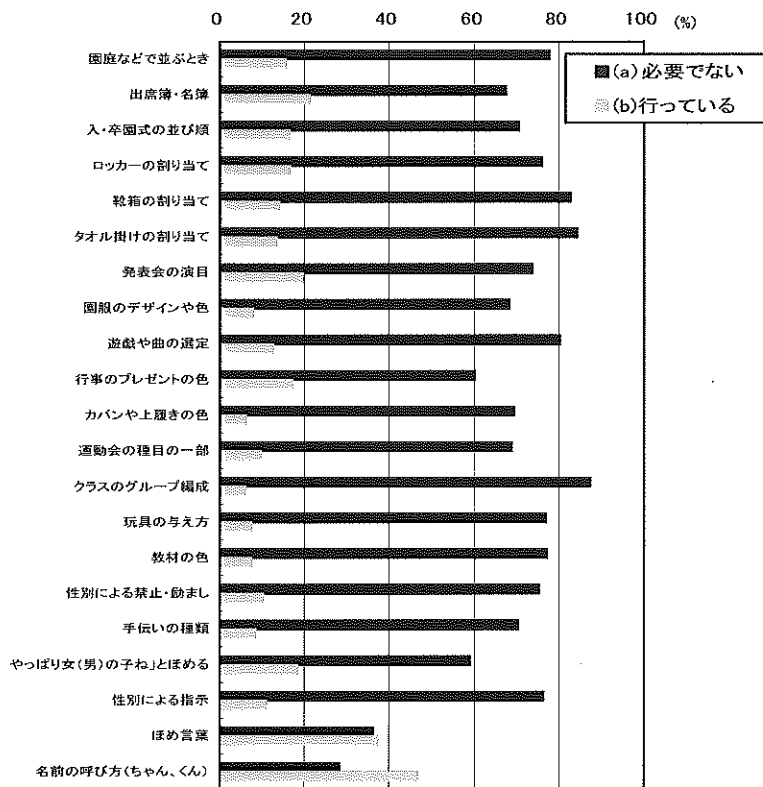


図1-2 性別カテゴリーの適用についての意見と園の実態に対する認識(保護者)



して継承されているために、保育者が自らのジェンダー・バイアスを意識化することを困難にしている。そのため、一人ひとりの子どもを尊重することを理念としては重視しながらも、実際はジェンダーを再生産しており、「個の尊重」を実態化することが阻害されている。

3. 平等幻想に根づく男女特性論

本調査においてもっとも顕著にあらわれた傾向のひとつが、「男女の本質的な違い」を尊重した上での「一人ひとりを大切にしたい」保育・子育て実践の自認である。図2に見るように、「男の子と女の子は本質的に違う」という考えに対し意見を聞いた項目で、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」に回答した者は、保護者515人中437人（85%）、保育士515人中411人（80%）であった。また、「男の子と女の子の本質的な違いを大切に育てる」という意見に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した者は、保護者515人中430人（83%）、保育士515人中375人（73%）で、ほぼ80%の保育士ならびに保護者が男女の差異を重視した特性教育論に依拠していることを表している。

さらに、自由記述においても、「男はこうあるべき、

女はこうあるべきという考えがあまり好きではありません。子どもも『男』である前に一人の人間として接していきたい」とジェンダー・フリーな考えを示しながらも、その根底においては「やはり、男女の本質的な違いを理解しつつ、その子の個性を伸ばしてあげるのが理想です」（保護者・女性）というように、あくまでも男女の特性論に立った上での「個の尊重」であることを表している。「男女である区別がある以上、体のつくりや母体といった違いがあるのは当たり前だし、男と女は根っこから違うと思う。その上で、『その子らしさ』を育ててあげたい」（保護者・女性）、『『男らしさ』『女らしさ』の前に、個人を尊重させて…と思う。男の子の本質、女の子の本質は違うし、役割もそれに伴ない違ってくる（出産など）。子どもには本質的な「男」「女」というのを教えたい」（保護者・女性）、「男と女は本質が全く違うと思うので、強要しなくても男らしさ女らしさは自然に出てくると思う」（保護者・男性）、「男性と女性は本質的にちがうので、男らしくあってほしいし、女らしくあってほしい」（保育士・女性）、「生物学的性差（男脳）（女脳）があることは大脳生理学的にも証明されているので、やはり男女の職業の適

図2-1 保育士のジェンダー意識

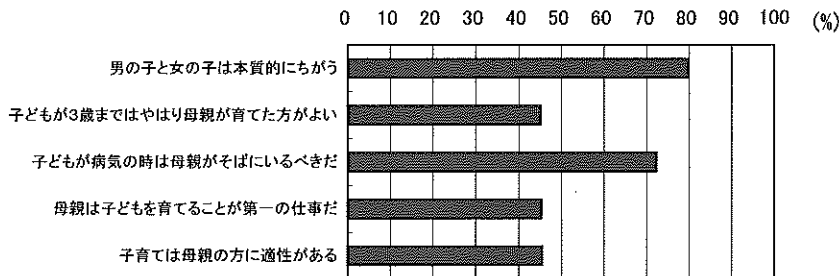
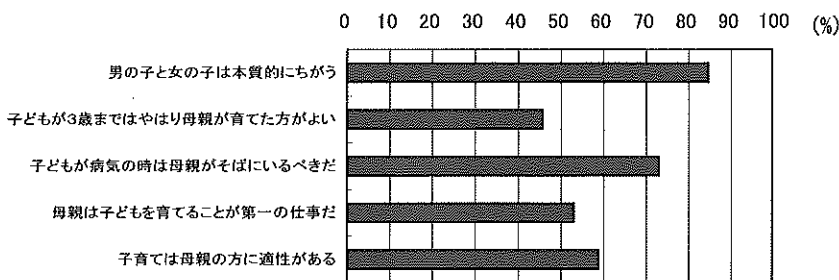


図2-2 保護者のジェンダー意識



性はあると思う」(保育士・女性)、「本質的にある男らしさ(強く、たくましく)、女らしさ(優しく、愛情深く、しとやか)を身につけられる保育をしていきたい」(保育士・女性)といった自由記述から、保護者、保育士ともに生物学的性差に基づく生得的な性役割観を抱いていることがうかがえる。つまり、子どもは、保育園においても、また家庭においても、「男女の本質的な違いを尊重」した上での「その子らしい」保育・子育て環境に置かれているといえる。

しかし、「男女の本質的な違いを尊重する」ということは、「男・女それぞれもって生まれた脳が違う」(保護者・女)、「男の子と女の子とは、本来、持って生まれたものが違う…基本的に家庭を守り、子どもを育てていく中心になるのが母親であり、父親が働いてくれるからこそ、生活していけるのだということ子どもに教えることが大切だと思う」(保護者・女性)といった記述に表れているように、男女の認識枠組みを基礎カテゴリーとして内面化させ、性別役割すなわち「ジェンダー」を刷り込むことに他ならない。性別役割分業を原則とする近代社会の秩序を支えるイデオロギーは、すでに、乳幼児期から植えつけられていると、M. Apple⁷⁾は指摘している。実際、本調査結果でも明らかのように、男女という分類カテゴリーは、同性集団の一斉行動を呼びかける統制手段として頻繁に使用されている。

したがって、「男女の本質的なちがいは単なる「身体的な性差」にとどまらず、男女の本質の違いが「性役割」を決定するという考えであることは明らかである。すなわち、女性は出産する生物学的機能をもっているから、子育てをする適性が生得的に備わっており、子育てが女性の役割であることは自然であるとする考え方である。このような考え方が、いかに「個性」あるいは「一人ひとり」「その子らしさ」を育てることを阻んでいるかということを感じにくくさせている。木村⁸⁾は、教師にたちにとって幼児教育・初等教育における性別カテゴリーは「『自然な』枠組み」であり、この枠組みを「教師たちは…一人一人の個性を大切にしている児童中心主義という基本原則をおかすものではないと自認している」と指摘している。さらに、性別のカテゴリー分けは一見「中立」のようで、その実、男女の不平等をごく自然なもののみならず子どもたちを方向付けるための基礎づくりとして機能していると主張している。

以上のことから、性別カテゴリーであるジェンダーが、あくまでも男性優位の近代社会を秩序づけるため

に作られた性役割概念であり、生物学的性差の上に男性優位の意味が人為的に付与されてきたものであることがわかる。その基になっているのが、科学的根拠をもたない古来からの女性に対する偏見すなわちジェンダー・バイアスであることを、保育環境のファクターである保育士ならびに保護者は十分認識する必要がある。したがって、保育実践の中で、真の意味での「個の尊重」を実現していくためには、性別カテゴリーが「自然な枠組み」であるとする根強い誤認を突き崩していく自己教育プログラムが必要だといえる。

4. 保育園時代は性に中立という幻想

本調査の自由記述において、「就学前の子どもに、『男の子らしさ』『女の子らしさ』にはこだわらず、その子一人ひとりを大切に」(保護者・男性)、「まだ小さい時期に男らしさや女らしさは気にしていません」(保護者・女性)、「5歳くらいまでは『男らしさ』『女らしさ』は関係ないと思う」(保育士・女性)といった記述がみられ、保育園時代には、つまり幼い年齢の時には、身体的な特徴にそれほど差異が見られないため、「まだ『男らしさ』『女らしさ』は意識せず、人間らしさを大切に育てるべきである」という考え方が、保育士においても保護者においても顕著に見られた。

他方、自由記述のなかに、「自分は男の子だということをこのごろ(4歳児)主張するようになる。友達やいろいろな人と関わるなかで、男の子女の子の違いを本人なりに考えている」「同じクラスの男の子から『女なのに仮面ライダーのシャツを着とる!』とか言われ、ここらへんから、男の子、女の子というのを意識させられたような感じですよ」とあり、「5歳くらいまでは『男らしさ』『女らしさ』は関係ない」(保護者・女性)という考え方を反証するような観察をしている保護者もいる。

そこで、子どもの認知発達過程をみると、生後24ヶ月から40ヶ月くらいの間で自分や他者を男女でラベルづけができるようになり、5、6歳までには男女にふさわしいとされる物や行動を理解するようになり、男女の相対的な価値や基本的なステレオタイプを学んでしまうという相良⁹⁾の指摘は、乳幼児期の子どものジェンダー情報への敏感さと取り込みの速さを示すものである。L. Darman-Sparks¹⁰⁾(1989)もまた、子どもは幼児期にすでに人種的偏見や障害を持つ人への無理解、そしてステレオタイプな性役割についてのメッセージを吸収し、それらは子どもの人格形成に影響を与えることを明らかにしている。

池田ら³⁴⁾は、なぜ日本においてこれまで保育に関わるジェンダーについて、研究、実践どちらの立場からも関心が薄かったのかということに対する仮説的な指摘をしている。つまり、乳幼児期は思春期と違い、乳幼児が「性的な存在」とみなされず、「小さいうちは、女も男もない。みんないっしょ」という「性とは無関係な」乳幼児のイメージがあり、区別して取り扱う必要はない、だから扱っているはずもないという「思い込み」への図式が成立しているという。K. Wellhausen¹¹⁾ (1966) も、幼児教育のジェンダー・バイアスが見過ごされやすいことを指摘している。

以上のことから、乳幼児期の保育・子育てにおいて、「男らしさ」「女らしさ」は関係ないという保育士・保護者の認識は改められ、乳幼児期こそ「個の尊重」を阻むジェンダーの刷り込みの効力は大きいという再認識が必要であることを示しているといえよう。

5. 保育士・保護者の固定的性別役割分業観

ジェンダーに基づく子育て観についての質問項目のうち、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」を合わせた回答は図2の通りである。「子どもの病気の時は、母親がそばにいるべきだ」に対しては、保育士515人中372人(72%)、保護者515人中377人(73%)であった。「子どもが3歳までは、やはり母親が育てた方がよい」は保育士232人(45%)、保護者236人(46%)、「子どもを育てることが母親の第一の仕事だ」に対しては、保育士233人(45%)、保護者274人(53%)、「子育ては母親の方に適性がある」は、保育士234人(45%)、保護者304人(59%)であった。保育士と保護者の約半数が、子育ては母親の役割と捉えている。『女性のデータブック』¹²⁾によると、2001年に出生した全国の子どもの親を対象とした同年度の厚生労働省の調査では、第1子出産前に「有職」であった母親の67.4%が出産後「無職」になり、多くの母親が出産を契機に退職していることが示されている。

さらに、本調査の質問の中に、「保育所(園)への送迎は主として誰が行っているか」を尋ねた項目があるが、表1に示すように、「主として母親」という回答が330人(64%)、「主として父親」は19人(4%)、「祖父母、身内の者による援助」は65人(13%)となっている。この結果からも、子育ては母親の役割であるという意識が行為にあらわれている。このような保育士、保護者の性別役割分業観は子どもにジェンダーを再生産し、「個の尊重」の実態化を妨げている。

固定的性別役割分業観に捉われることがなぜ問題な

のかを示唆する女性の保護者による、次のような自由記述が見られた。「第一子が生まれたころまでは、気づいていなかったが、第二子を産んだ後、ジェンダーに気づいた。仕事をしたいのに、出産のため中断しなければならず、そのためにやりたかった仕事を一番大事なときに担当できなかった。この苦しさは、なんだろうと思ったときに、女性が男性と同様に仕事をすることの難しさを知った。それをきっかけに、女だからという理由で、行動が制限されていることが、まだまだたくさんあるということにも気づいた。『男女共同参画社会』を実現することが、女性にとっても男性にとっても自分らしく生きるための選択肢が増えることだと、多くの人に理解してほしいと思っている。やはり、子どものころからの『刷り込み』が大きいと思うので、子育ての中で『男らしさ』『女らしさ』について、固定観念を植えつけないようにしなくては強く思う」。ここでは、女性として母としてのジェンダーによる抑圧への気づきが表現されており、明らかにジェンダーは個を縛るものであることの問題性が指摘されている。

したがって、保育者も保護者もジェンダー・センシティブになり、子どもの個性を抑圧しない保育実践を行う必要がある。

IV. 今後の課題

以上のことから、本質的な男女のちがいが前提とされ、男女の性別カテゴリーの使用がきわめて自然なものであると捉えられているため、保育・子育てにかかわる者のジェンダー意識や行為は、子どもの理解や子どもの育ちに大きな影響を与えていることが明らかになった。また、保育理念としての「個の尊重」や「一人ひとりを大切にしたい」保育を実践していると自認しているがゆえに、かえってジェンダーの再生産を行っていることが見えにくくなっている実態が示唆された。

そこで保育・子育て環境において「個の尊重」を真に実態化する上での今後の課題は、乳幼児期にはどのような生活体験が望ましいのかを検討することである。そのためのポイントとして、以下の3点をあげたい。

第1に、性別や人種などの偏見に対抗するカリキュラムを作成し、教材や遊具の選択など、多様性に富む保育環境を作り出すこと。L. Darman-Sparks⁴⁰⁾ (1989) は、『ななめから見ない保育』において、乳幼児期からの人権保育の必要性を強調し、保育者自身の自己教育と保護者を巻き込んだアメリカの人権教育の1つのガイドラインを提示している。このガイドラインを作成

する上で考慮されているのは、保育場面での子どもと保育者のかかわりである。たとえば、「男の子が感情を自由に表現することを認めているか」「女の子に対して男の子よりも多くの援助を与えていないか」「男の子と女の子の同じような行為で、男女差ゆえに異なった解釈をされたり、異なった対応を受けたりしていないか」「女の子には容姿について、男の子にはあることができたということに対して賞賛を与えていないか」「すべての子どもたちが、その属する文化に沿った学習スタイルで尊重され援助されているか」ということなどである。

第2に、幼児教育において見過ごされやすいジェンダー・バイアスを排除すること。K. Wellhausen¹¹⁾ (1996)は、「女の子と男の子に同じように時間を使い、注意を向けること」「女の子と男の子に同じように機会を与える。作業などを分けてはいけない」「女の子にも男の子にも彼らの持っている能力をほめるべきで、女の子を容姿だけでほめてはいけない」「子どもが性差別的な発言をした場合、無視してはいけない」という保育者が配慮すべき具体的な提案をしている。

第3に、保育者養成プログラムの開発と地域の男女共同参加社会づくりのネットワークを形成すること。山梨県立女子短大(2005年4月から山梨県立大学)は、1999年から「男女共同参画社会をひらくジェンダー・フリー教育と啓発」研究活動に取り組み、保育者養成プログラムの開発や養成校の教員と保育所(園)・幼稚園の保育者・保護者、地域の子育て支援関係者、男女共同参加社会づくりにかかわる人々とネットワークを形成し、研究を地域における実践と結びつけた乳幼児期からのジェンダー・フリー教育を進めている。

以上のような国内外の「個の尊重」が実践されている先駆的な活動を検討し、いずれも、ジェンダー・フリーの保育・子育て実践であることを確認することができた。乳幼児期からの子どもたちに、男女が共に生きる仲間としての共生感を育成するためには、ジェンダーの視点を導入して、子育て環境や保育実践の見直しをすることが重要であると考えられる。つまり、隠れたカリキュラムが「単なる慣習」「ささいなこと」「自然なこと」として日常的に機能し、ジェンダーの再生産が行われている状況に気づく必要がある。そのためには、子どもを取り巻く大人たちが、自らのジェンダーと向き合い、ジェンダーにセンシティブになることが求められている。保育者、保護者、保育者養成校教員、地域の子育て関係者が連携し、それぞれが自らをエンパワーメントしていくことが不可欠といえよう。

筆者らは、今後、保育・子育てにおけるジェンダー研究をアクション・リサーチ(養成校と地域の保育現場が協力して実践を行うための研究方法という意味に用いる)として位置づけ、「個の尊重」を実現できる保育・子育て実践につなげていきたいと考えている。

参考・引用文献

- 1) 松村和子:「その子らしさ」を生かす保育、第45回日本保育学会大会発表論文集、470-471 (1992年)
- 2) 森 繁男: 幼児教育とジェンダー構成、教育現象の社会学、世界思想社、京都、132-149 (1995)
- 3) 池田政子、阿部真美子、伊藤ゆかり、川上哲夫、沢登美美子、佐野ゆかり、藤谷 秀、川池智子、高野牧子、坂本玲子、出口泰靖: 乳幼児期のジェンダー・フリー教育: 問題提起と地域での実践に向けて(1)、山梨県立女子短期大学紀要、34、101-119 (2001)
- 4) 池田政子、阿部真美子、伊藤ゆかり、川上哲夫、沢登美美子、佐野ゆかり、藤谷 秀、高野牧子、坂本玲子、出口泰靖、川池智子: 乳幼児期のジェンダー・フリー教育: 問題提起と地域での実践に向けて(2)、山梨県立女子短期大学紀要、34、121-134 (2001)
- 5) 佐藤和順、田中亨胤: 幼稚園教師の意識変化に着目したジェンダー・フリー・プログラムの効果—教師スタンスの分析を手がかりとして、保育学研究、第41巻2号、40-49 (2003)
- 6) 佐藤和順、田中亨胤: 生活史的アプローチによる幼稚園教師のジェンダー観の揺らぎに関する研究—ジェンダー・フリー・アプローチを手がかりとして: 乳幼児教育学研究、13、37-50 (2004)
- 7) Apple, M.W.: *Ideology and Curriculum*. Routledge & Kegan Paul. 1979.
- 8) 木村涼子: 学校文化とジェンダー: 勁草書房、東京、1版 (1999)
- 9) 相良順子: 幼児・児童期のジェンダー発達、ジェンダーの発達心理学、14-29 (2000)
- 10) スパークス、L.D.、玉置哲淳・大倉三千代 編訳: ななめから見ない保育—アメリカの人権カリキュラム、解放出版社、大阪 (1994)
- 11) Wellhausen, K.: Do's and Don'ts for Eliminating Hidden Bias. *Childhood Education*. Vol.73, No.1, 36-39, Louisiana.
- 12) 井上輝子、江原由美子編: 女性のデータブック第4版、有斐閣、東京、20 (2005)
- 13) 松村和子: イギリスにおける幼児期の男女平等教育、学校をジェンダー・フリーに、明石書店、東京、1版 (2000)
- 14) 井上輝子、上野千鶴子、江原由美子、大沢真理、館 かつお編: 女性学辞典、岩波書店 (2005)

- 15) 金子省子、青野篤子：保育所・幼稚園におけるジェンダー・フリー保育者・保護者インタビューと観察をもとに、第57回日本保育学会大会発表論文集、568-569 (2004)
- 16) 森 隆子、川田富子、坂田仁美：保育の中のジェンダーに関する一考察—S 保育所における子どもの実態から検討する—、第50回日本保育学会大会発表論文集、568-569 (1997)
- 17) 森 隆子、川田富子、善本佳代子、坂田仁美：保育の中のジェンダーに関する一考察（2）—保育者の実態から検討する—、第50回日本保育学会大会発表論文集、708-709 (1997)
- 18) 森 隆子、坂田仁美：保育の中のジェンダーに関する一考察（3）—保護者の実態から検討する—、第50回日本保育学会大会発表論文集、416-417 (1997)
- 19) 森 隆子、坂田仁美：保育の中のジェンダーに関する一考察（4）—改定保育所保育指針から検討する—、第50回日本保育学会大会発表論文集、94-95 (1997)
- 20) 坂田仁美、森 隆子：保育の中のジェンダーに関する一考察（5）—ジェンダーの視点で保育環境を検討する—、第54回日本保育学会大会発表論文集、524-525 (2001)
- 21) 野尻裕子、栗原泰子：川村学園女子大学女性学年報、創刊号、81-87 (2003)
- 22) 阿部真美子、川上哲夫、沢登芙美子、高野牧子、坂本玲子、出口康靖、佐野ゆかり、川池智子、池田政子：ジェンダー・フリー教育研修プログラムの実践的研究—保護者・保育者を対象として、第53回日本保育学会大会研究論文集、704-705 (2000)
- 23) 池田政子、阿部真美子、佐野ゆかり、高野牧子、坂本玲子、沢登芙美子、川池智子、川上哲夫、出口泰靖：保育・子育てにおけるジェンダー：保育者および親の意識、第53回日本保育学会大会研究論文集、706-707 (2000)
- 24) 佐藤和順：幼稚園におけるジェンダーの再生産、第54回日本保育学会大会発表論文集、436-437 (2001)
- 25) 佐藤和順：幼稚園教師の性役割観をモデル環境にした子どものジェンダー形成、第55回日本保育学会大会発表論文集、368-369 (2002)
- 26) 大日向雅美：母性の研究—その形成と変容の過程、伝統的母性観への反証、川島書店、東京、4版、(1992)
- 27) 大日向雅美：母性愛神話の罫、日本評論社、東京、1版 (2000)
- 28) 伊藤裕子、池田政子、大日向雅美、上瀬由美子、相良順子、園田直子、高橋裕行、中西祐子、無藤清子、宗方比佐子：ジェンダーの発達心理学、ミネルヴァ書房、京都、1版 (2000)
- 29) 原 ひろ子、箱かおる 編：母性から次世代育成力へ—産み育てる社会のために、新曜社、東京 (1991)
- 30) 山梨県立女子短期大ジェンダー研究プロジェクト 編：0歳からのジェンダー・フリー—男女共同参画山梨からの発信、生活思想社、東京 (2003)
- 31) 木村涼子、小玉亮子：教育／家族をジェンダーで語れば：白澤社、東京 (2005)

“Respect for Individuals” in Child Care and Child Raising Practices: A Reconsideration from A Gender Perspective

Yasuko Mimura* Yumi Rikitake**

< Abstract >

This paper sets out to explore from a gender perspective the extent to which the ideal of ‘respect for individuals’ and ‘individuality’ is realized in childcare and child raising practices. It is based on the hypothesis that despite a commitment among parents and careers to treating children as individuals, in practice gender stereotypes are used as a means of social control.

This study is based on a large-scale quantitative survey of childcare and child raising practices. The sample base is made up of 515 parents and careers of children which were chosen from parents and careers living in Kyushu area.

The survey results revealed the following: 1) the idea of “respect for individuals” is mediated by the parent or career’s own perceptions of gender, meaning that respect is for a gendered and not gender neutral individual, 2) in reinforcing gender stereotypes, child careers and parents do not sufficiently recognize the ways in which male and female gender are asymmetrically constructed on the basis of gender-biases, 3) child careers and parents in their day-to-day practices reproduce gender stereotypes in children without being aware of their own internalized gender biases.

These findings reveal a big gap between the ideal of treating every child as an individual and the reality that every child is either treated as a boy or a girl individual. Thus, respect for individuals occurs within the limitations of respect for a gendered individual. This suggests a need for a reconsideration of what ‘respect for the individual’ actually means in order for child careers and parents to provide children with a learning environment that is free from gender biases and where the individual character of each child is fully respected and developed.

Keywords: respect for individuals, gender bias, hidden curriculum, gender sensitive, gender free

* Professor, Department of Early Childhood Education and Care, Seinan Jo Gakuin University Junior College
** Part-time Lecturer, Life Study Department, Seinan Jo Gakuin University Junior College